

アンズ

小林 幹夫

(人間社会学部社会園芸学科)

Apricot (*Prunus armeniaca* L.)

KOBAYASHI Mikio

1. アンズの花と実

「あんずよ 花着け 地ぞ早やに輝け あんずよ 花着け あんずよ燃えよ」これは、金沢市の郷土の文人室尾犀星の詩碑に刻まれた自筆の一節である。

春の日差しとともに、モモやサクラ、スモモ、アンズの花が一斉に咲きそろう。まさに百花の粧いというべきで、閉ざされていた人々の心が急に明るく弾み、春を迎えた希望と喜びに新しく燃えるのである。

サクランボやウメ、スモモ、アンズ、モモは、清楚、絢爛の差はあれ、いずれも花の美しいバラ科の植物である。しかし、果樹分類上では、同じバラ科のリンゴやナシと区別して核果類(Stone Fruits)と呼んでいる。

東北地方および北海道ではアンズとウメを混同しており、青森県でこれまでウメと呼んでいたものは、ほとんどがアンズであって、ウメとしてはわずかにアンズとの雑種でないかといわれる耐寒性の比較的強い豊後ウメがあるにすぎない。したがって、北海道ではサクラがウメよりも早く咲くというが、これはサクラがアンズよりも早くに咲くことである。

一方、原生地から東方に伝わったアンズは、東アジアの北方に適し、温帯中部以南には適さない東洋系品種群が形成された。

2. 原生地は中国

アンズは、バラ科サクラ属の落葉樹である。原生地には諸説あるが、中国の山東省、河北省の山岳地帯から中国東北地方の南部とする説が有力である。

中国では、BC3000～BC2000にすでに利用されていた。BC3～BC2世紀には栽培が始まり、5～6世紀には赤杏、黄杏、李杏、文杏等の品種がみられる。花を觀賞するとともに、最初のうちは果肉よりは核の中の仁(杏仁)を解熱、咳止めなどの薬用として利用していた。

アンズの記載のある最古の文献は「夏小正」で、西漢墓からも杏核(アンズの種)が発見されている。古書では「山海経」や「礼記」にもその記載がみられるほか「齊民要術」や「本草綱目」などにも詳しい記述が残されている。

3. ペルシャを経てギリシャ、ローマへ伝播

ド・カンドル(1883)によると、ギリシャ時代のテオフラストス(前373～前287)は、アンズについてまだ記していない。プリニウス(23～79)はその著「博物誌」『Historia Naturalis』(77)に、アンズのことをPraecociumの呼称で記載している。実は、その30年前にギリシャからローマに伝わったという。

ラウフェル(Laufer,1919)によると、アンズはモモとともに、紀元前1,2世紀のころ中国からペルシャ(イラン)に伝わり、アルメニアを経て1世紀に地中海沿岸のギリシャに渡り、次いでローマへと入ったのである。したがって、モモの場合と同じに華北やペルシャの風土に適するアンズ品種の中から南ヨーロッパの風土に適する品種を選抜改良したのである。すなわち、植物分類学上の一種のアンズから東アジア系と南ヨーロッパ系の2系統の品種群が形成されたので、植物生態学上から見ても興味深い。

4. ヨーロッパへの広まり

ローマからヨーロッパ各地に広がり各地で改良されて南ヨーロッパ系品種群が形成されたが、ヨーロッパ北部へも徐々に広まり、イギリスへはヘンリー8世の時代の16世紀の初め(一説には14世紀の中頃)にカトリック教の牧師によって、イタリアから輸入された。イギリスではそれまでアンズを

知らなかったので、初めはPraccox(早熟の果物)と呼び、ついで、a Praccox→ apraccox→ apricox→ apricookと変わり、最後にapricotになったとされている。

ヨーロッパにはアルメニア地方から伝わったため、アンズの学名を*Prunus armeniaca* L.というように、近世に至るまでアルメニアが原生地と考えられていた。なお、現在の世界一の産地であるアメリカには、スペインから18世紀に伝わっている。

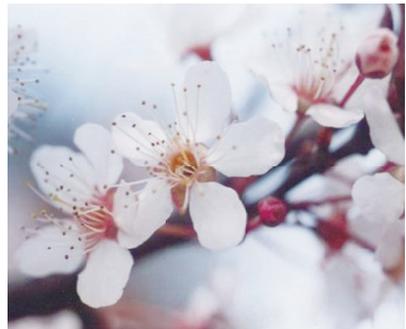
5. 日本への伝来

日本には、かなり古い時代に中国より薬用として伝来している。わが国最古の本草書『本草和名』(918)、わが国最初の分類体の漢和辞書『倭名類聚鈔』(931~938年中に撰進、源順)では、アンズに「加良毛毛(からもも)」の和名をつけている。『延喜式』(927)に「山城、摂津、甲斐、信濃より杏仁一斗乃至7斗5升を進献する」とあり、当時アンズの栽培が始められていたことが分かる。

当時は果樹としてより、観賞用として、杏仁が薬用として用いられていた。アンズが果樹として、果肉も利用するために栽培されるようになったのは比較的新しく、江戸時代に入ってからのものである。ただ、それでも大半は杏仁の生産に向けられており、明治時代に入り化学合成医薬品の発達により杏仁の需要が減少するにつれて、果樹としての利用が増加していった。

6. アンズの名は「安牟寸(あむず)」

菊池秋雄によるとアンズの名が初めて書籍に現れたのは、林道春(羅山)の『多識編』(1612)で、その中に「加良毛毛(からもも)、俗にいう安牟寸(あむず)」とある。ただ、杏という俗称はかなり古い時代から用いられたと思われるが、いつ頃かは不明である。杏の語源は、「杏子」の唐音「アンス」あるいは甘酢梅(あますうめ)にちなむとされている。なお、杏仁は「あんにん」とも「きょうにん」とも発音するが、「杏」をアンと発音するのは唐音、キョウは呉音である。



アンズの花

7. 「杏林」は医者之美称

アズの栽培種を野生種と区別するときには、ホンアズという。野生種には、マンシュウアズとモウコアズ等があり、果実としての食用価値はないが、後者の杏仁は薬用に供されている。

わが国では、アズの栽培面積は少なく、長野県が主産地で、次いで青森県である。

長野県のアズが、江戸時代のころから栽培が盛んになった理由については、幾つかの言い伝えがある。1つは戦国時代の弘治2年(1556)に、窪寺平治右衛門が安茂里村(現長野市)で栽培を始めたというもの、1つは今から300余年前、宇和島藩主の娘が松代藩(現長野県)に輿入れする際に永く故郷を忘れないようにと苗木を2本持参し、それを城内に植えたのが始まりというものである。

中国では、医者之美称として「杏林」という言葉がある。これは三国時代の名医董奉(とうほう)が診察料を受けとらぬ代わりに患者にアズの木を植えさせたところ、数年で10万余本のアズの林ができ、これを「董仙杏林」と名づけた、という故事にもとづく。古来、アズが医薬として高い評価を受けていたことを指すものである。

引用文献

1. 星川清親(1978)栽培植物の起源と伝播:240 - 241. 二宮書店
2. 岸本修ら(1992)日本のくだものと風土:79 - 87. 古今書院
3. 今井敬潤(2006)くだもの・やさいの文化誌:94 - 101. 文理閣
4. 梅谷献二・梶浦一郎(1994)果物はどのようにして創られたか:38 - 42. 76 - 80 筑摩書房
5. 塚谷裕一(1995)果物の文学誌:201 - 205. 朝日新聞社
6. 間亭谷徹(2005)果樹園芸博物誌:86 - 92. 養賢堂
7. 間亭谷徹ら(2000)果実の真実:90 - 91. 化学工業日報社